

ブルックナー《第八交響曲》のリニューアル・ヴァージョンについて

川崎 高伸

2011年の3月26日（土）に演奏されるブルックナーの《第八交響曲》では、一般に演奏されているハース版やノーヴァク版 VIII/1（第1稿）、VIII/2（第2稿）さらには最近では演奏されることはまずない1892年の初版などとは違う楽譜が使用されます。アダージョについては、2004年に世界初演されてご好評いただいた〈アダージョ2〉がそのまま再演されますが、そのほかの3つの楽章についても、ノーヴァク版 VIII/2の基本資料となったウィーンのオーストリア国立図書館へブルックナーが遺贈した自筆譜 (Mus.Hs.19.480) の再検証とともに、今回はウィーンの楽友協会に残されている筆写譜をも資料として用い、概略的に言えば『ノーヴァクが校訂した第2稿をさらに吟味、再校訂した形』の楽譜が使われます。

この楽友協会の筆写譜（資料請求番号：A178aXIII32394）というのはブルックナーの自筆譜の最終形を忠実に筆写したものであって（すなわちノーヴァク版 VIII/2 とほぼ同じ形態であって、自筆稿にすでにカット指示されている部分は全く筆写されていません）、その筆写譜の中には初版（1892年）のための膨大な量の修正・変更が書き加えられています。大部分は強弱やテンポに関するものですが、一部には聴いて分かる音符自体の変更も含まれています。そして、そのほとんどが、初版に採用されているので、この筆写譜は初版のための印刷用原稿として使われたことが窺えます。しかし、膨大な修正・変更の中には初版に採用されなかったものも存在し、また、ここに加筆されていないのに初版では変更されているものも見られるなど、この筆写譜原稿と実際に出版された初版の間には若干の齟齬も生じています。したがって写植師に渡された原稿は、この筆写譜を清書し、さらにその上からいくつかの最終修正が加えられた別のもので推測されます。とにかくこの筆写譜は、研究者の間でも話題にされることは少なく、今後の綿密な研究成果が待たれるところです。その成果によっては、《第四交響曲》のコースヴェット版のように全集版から出版される可能性も否定し得ません。

楽友協会によると、ここにはブルックナーの自筆の修正が含まれるということですが、全ての変更をブルックナーが書いたとは到底思えず、特に強弱に関する変更はブルックナー固有のブロック式のものではなく、抑揚を重視した滑らかなものに変えられているので、ヨーゼフ・シャルクやオーベルライトナーが書き変えたものとみられます。したがってブルックナー的でない加筆・修正については、今回は排除されました。

直接聴いただけで判別できる音符上の相違はピチカートへの変更などを含めて結構ありますが、特に分かりやすいものを挙げておきましょう。第1楽章展開部直前130～140小節あたりのファゴットとトランペットの追加（トランペットの旋律は第1稿にあったものの焼き直し）、同じくコーダ直前385～7小節のトロンボーンの追加、など、いずれも初版にも採用された変更ですが、スケルツォ52小節3拍目のティンパニの8分音符2つから4分音符1つへの変更は、なぜか初版には採用されず、今回全く新しく耳にする響きとなります。なお、自筆譜はこの筆写譜の修正前と同じく最後の8分音符は変ホですが、ハースもノーヴァクもブルックナーの第1稿からの転写ミスと判断してか、チェロ・バスに音形を合わせて変イの音に変更しています【譜例1】。しかし、今回は変イ音の4分音符で叩かれるので、この不一致についての選択は回避されています。

【譜例1】

●自筆譜

A page of handwritten musical notation, likely a manuscript. The score is written on multiple staves. The top staves are labeled with instrument abbreviations: Fl. I & II, Clarinet, Bassoon, B. (Bass), V. I. (Violin I), V. II. (Violin II), Viola, and Cb. (Cello). A red circle highlights a specific passage in the Clarinet part, and a red arrow points to it from the right. The manuscript shows various musical notations including notes, rests, and dynamic markings. At the bottom of the page, there is a library stamp: "オーストリア国立図書館音楽部門所蔵 Mus. H. 19.180".

●ノーヴァク版Ⅷ/2

A page of printed musical notation, identified as the Novak edition (Ⅷ/2). The score is arranged in a standard orchestral format. The instruments listed on the left are: 1.2. in F (Trumpets), Tromp., 3 in F (Trumpets), A.T. Pos. (Alto Trombone), B. (Bass Trombone), K.-Bth. (Kornet/Bass Trombone), Pt. (Piano), Viol. I & II (Violins), Viola, Vc. (Violoncello), and Kb. (Kontrabaß). A red circle highlights a specific passage in the Piano part, and a red arrow points to it from the right. The score includes various musical notations such as notes, rests, and dynamic markings like *divisi* and *marc. temp.*. The page number "50" is visible at the bottom center.

遺贈稿である自筆譜 (Mus.Hs.19.480) については全面的に再チェックし、ノーヴァク版 VIII/2 の誤りを修正したうえ、不必要なカッコ処理を排除しました。たとえば、フィナーレ第3主題再現の直前577小節のホルンとヴァーグナー・チューバは、自筆挿入譜（遺贈稿最終形態）ではいずれも全休符になっているので削除しました【譜例2】。すなわち、初版の方が正しかったというわけです。またカッコについても、例えばスケルツォの展開部103小節以降にあるフォルテシモでのヴァイオリンのスラーは、自筆譜にはないため削除されました（ノーヴァク版ではカッコが加えられているので、本当はスラーがないことはこの版からでも推測出来ることです）。

【譜例2】

●自筆譜

The image shows a handwritten musical score for brass instruments. The instruments listed on the left are: Fl. (Flute), Clar. Bb (Clarinet in Bb), Fag. (Bassoon), F. (French Horn), B. (Baritone), and T. (Tuba). A red circle highlights the instrument list, with a red arrow pointing to the Tuba part. Another red circle highlights the word 'it u' in the top right, with a red arrow pointing to it and the text 'Uu=コーダへ飛ぶ指示' (Uu = instruction to fly to the Coda).

オーストリア国立図書館音楽部門所蔵：Mus.Hs.19.480

●ノーヴァク版Ⅷ/2

The image shows a printed musical score for brass instruments, page 156. The instruments listed on the left are: Ob. 1.2 (Oboe), Klar. 1.2 in B (Clarinet in B), Hrn. 1.2 in F (Horn in F), Ten.-Tb. 2 in B (Tenor Tuba in B), B.-Tb. 1.2 in F (Baritone Tuba in F), Fk. (Fagott/Bassoon), Viol. 2 (Violin 2), Vla. (Viola), Vc. (Violoncello), and Kb. (Kontrabaß/Cello). A red circle highlights the Tenor Tuba part, with a red arrow pointing to it. The score includes dynamic markings like 'p' and 'pp', and performance instructions like 'Pp viel langsamer', 'nicht gebunden arco', and 'pizz. p'. The page number '156' is in the top left, and '580' is in a box at the bottom.

● 1892年初版

8. 8288

これによって、歯切れのよいブルックナーが意図した本来の音楽が聴かれると思われまます【譜例3】。《第八交響曲》の場合、ハースが第1稿を引用したり、独自の変更を加えたりして出版したため、その原版を流用したノーヴァク版には、自筆最終稿への修正漏れやハースの解釈を安易に容認してしまっているケースが、ときどき存在するのです。

【譜例3】

● 1892年初版

S. 8288

● ハース版

110

●ノーヴァク版Ⅷ/2

●自筆譜

オーストリア国立図書館音楽部門所蔵：Mus.Hs.19.480

さて、遺贈稿にはフィナーレの長大な展開部の中央部に、今まで聞いたこともない不思議な箇所が存在します。練習記号<Z>から<Aa>までの42小節をカットしようという案とともに、カットされた前後を繋ぐための4小節のティンパニだけの空虚な移行句のページが1枚挿入されているのです【譜例4】。ところが、ここにはハースが復元したことでも知られている『死の行進』直後の20小節の場合のように、カットされる部分にバツ印が入れられているわけではありません。もちろん、ハースもノーヴァクも、この不可思議な挿入譜などは全く無視して、躊躇なくカットなしの方のみを印刷しています。実際このくだりは展開部の中でも特に美しい部分ですから、誰もがその案に賛成するでしょう。そのため、この移行句は、取り除かれもせず、厳然と自筆稿の一部を形成しているにも拘わらず、自筆稿を見たことのない人には全く未知のものとなっています。

そこで、このカットが楽友協会の筆写譜ではどうなっているかを確認してみました。ここではそれが自筆稿のような後からの挿入譜としてではなく、一連のものとして筆写されています（筆写時にはこの挿入ページはすでに存在していたということです）。そしてこのページには後になって何者かの手によって「印刷しない」と書き加えられています。すなわち、このカットは初版出版の直前に回避されてしまったので、初版はカットなしに印刷されることになりました。実は自筆譜の挿入ページの上端には（Z breibt weg）「Z省略」とカッコ書きで指示が記載されているのですが（【譜例4】参照）、これは筆写完了後にブルックナーが書き加えたもので（筆写時にすでにこの指示が存在していたらこのページ自体が筆写されなかったはずだから）、この書き込みに呼応して筆写譜にも「印刷しない」と書き加えられたことが分かります。

いうこの楽章で最も遅いテンポ指示を書き加えています【譜例5】。そしてそれ以降の部分にはテンポを戻す指示はありません。

【譜例5】

●ノヴァク版Ⅷ/2

●1892年初版

初版のカット表示

非常に静かに始める

← 当初の練習記号の位置

●自筆譜

ハース版・ノヴァク版Ⅷ/2
採用練習記号 Pp

← 初版採用練習記号

初版では、口数の多いテンポ指示を何度も乱発した末、結局は楽章冒頭のアレグロのテンポへ戻すよう設計されています。ハースは第3主題のこの *viel langsamer* の指示を削除して、暗黙のうちにブルックナーのテンポ設計を拒否しています。唯一ノーヴァクだけが正直に自筆譜通り印刷しているのですが、指揮者たちにはその重みが響かないようです。

実際、ノーヴァク版 VIII/2 を使用していてもちゃんと *viel langsamer* を実現している演奏を聴いたことがあります。多分それでは『もたない』ということを経験者たちは肌で感じているからでしょうね。唯一チェリビダッケの演奏が *viel langsamer* のテンポを実現しているように聴こえますが、それは第3主題で特に遅くなったわけではなく、全体的に遅い流れの中での必然のテンポであって、特に *viel langsamer* を意識したものではないように聴こえます。とにかく展開部の小節数を比較すると、第1稿は190小節、第2稿は184小節、そしてカット版は146小節となります。

前回のアダージョ2の再演に加えて、今回の演奏の最大の特徴は<未知のカット>と<アダージョ終結>をセットにした大幅な構造の相違を伴うフィナーレにあります。また、全ての楽章が細部において再考証され、さまざまな自筆譜の新しい解釈が提示されます。ノンヴィブラートを取り入れた清澄な響きの中で、このようなりフレッシュされたスコアが用いられることによって、ブルックナーはこんなことも考えていたのだという、この作品の未知の側面が、巨大な交響曲の中でさまざまに練り広げられるスリリングで興味深い演奏となることが期待されます。

[補足：1] クレンペラーのフィナーレでのカット

クレンペラーがEMIから《第八交響曲》を出したとき、大きな話題になったのが大胆な2か所のカット（提示部末から展開部の大部分と再現部第3主題の合計220小節）の問題でした。当時からファンの間では非難轟々で、今このフィナーレを聴いてみても、ゆったりとしたテンポの中で堂々と進行する割には意外とあっさり終わってしまい拍子抜けしてしまうことには変わりません。たとえて言うなら、豪華なフルコースの料理を味わっているのに、肝心のメインディッシュがいつ来たのか分からないうちにデザートが出てきてしまったような物足りなさを感じるのです。クレンペラー自身は、カットの理由を『作曲者は音楽的な工夫をし過ぎてまとまりがなさ過ぎるように私には思える。』というような意味不明の説明しかしていませんが、学者の中にはこのカットはクレンペラー自身の創案ではなく元ネタがあったのではないかと詮索する人もいます。その手掛かりが当時この曲の初演を準備していたマンハイムのワインガルトナーへ宛てた1891年1月27日付のブルックナーの手紙です。『《第八交響曲》の試演はもう始まっていますか？それで聴いた感じはいかがでしたでしょうか。フィナーレは指示してあるように正確に省略してください。このフィナーレは今の人々にはあまりに長く感じられるでしょう。省略なしの演奏は、未来の人たちと、この曲の良さを理解できる友人や専門の音楽家の間でだけ通用するものです。テンポはどうぞご自由に。』ここに書かれている『省略』とは、少なくとも自筆譜にバツで削除された部分、すなわちハースが復元した部分ではないことは明らかです。『未来の人たち』に残すためにはバツは付けませんから。そこで、遺贈稿に書き加えられている練習記号ZからAaまで（展開部中央の42小節）と再現部第3主題（自筆稿には2つの案が示されている）をブルックナーはワインガルトナーに提案したのではないかと、くだんの学者は推定しているのです。クレンペラーはそういった状況を知っていて、そのカットをさらに拡大して彼の演奏に取り入れたのではないのでしょうか。いわばカット案の集大成と言ったところでしょうか。なお、初版ではこれらとは全く違う再現部第2主題を中心とした58小節が *vi-de* として提案されていますが、それは更に奇妙なものです。

とにかく、弟子たちについては、従来からブルックナーの意図に反して短縮や加筆などの逆行行為を行なったとの側面ばかり強調されてきたきらいがありますが、実際には単純にカットのみを主張したのではなく、様々な議論の中からブルックナーと彼等にとって最善の形を模索し続けたのでしょう。

【遺贈稿のカット案1】Z～Aa（345～386）42小節－新稿4小節＝38小節

【遺贈稿のカット案2】A案：（577～646）70小節

B案：（581～646）66小節

【クレンペラーのカット】

Q ~ Aa (2 3 1 ~ 3 8 6) 1 5 6小節 + Pp ~ Uu (5 8 3 ~ 6 4 6) 6 4小節 = 2 2 0小節

【初版のカット提案】 Kk の5小節目 ~ Pp の3小節前 (5 2 3 ~ 5 8 0) 5 8小節

(註) アルファベットは練習記号。

小節数は混乱を避けるため全てノーヴァク版 VIII/2 に統一しました。

[補足：2] ruhig (ルーヴィッヒ) について

ここで話題にするのは、フィナーレの壮大なコーダの中で唯一書かれている「言葉による指示」についてです。この ruhig は普通<静かに>と訳されることが多く、それではテンポ指示なのか表情指示なのかよくわかりません。一般には、幾分遅めに始めて、音が大きくなるあたりで、ブルックナーが指示を書き忘れたか、あるいは自明のこととして書き込みしなかったものと判断されて、自由にテンポを変えて(速くして)演奏されます。初版では練習記号 Ww (6 7 9小節 = ノーヴァク版) のところで Erstes Zeitmaass (最初のテンポで、すなわち2分音符 = 6 9) に戻るよう指示されているので、この初版の指示がいまだに現代の演奏に大きな影響を残しているようにも思われます。初版の基となった楽友協会の筆写譜には流れるような雑な筆記体で、この Erstes Zeitmaass が追加記入されていますが、これは自筆譜のブルックナーの筆跡とはかなり違うように見えます(例えば再現部が始まる所)。ブルックナーは<a>を重ねては書いていません。

テンポを速めることは本当にブルックナーの意図に沿った解釈なのでしょうか? コーダでのテンポ変更は ruhig<静かに>というあやふやな指示に対する誤解とテンポを急ぎ立てたくなるような大きく盛り上がる音楽とのイメージの矛盾から来る勝手な解釈に過ぎないのではないのでしょうか? もしそうであるとすると、ブルックナーが ruhig という指示用語に込めた正しい意味を探り、楽譜のとおりコーダの最初から最後までを一貫して ruhig で演奏すべきではないのでしょうか。少なくとも第2稿においては、ブルックナーはテンポの加速を認めていないように楽譜からは読み取れます。すなわち<元のテンポに戻す = 速くせよ>という指示は、自筆譜のどこにも記載されていないし、それに基づいて出版されたハース版にもノーヴァク版にも全く採用されていないのですから。

ブルックナーが用いたドイツ語 ruhig は、イタリア語では tranquillo、英語で言えば tranquil すなわち<心が平静な>という意味であり、tranquilizer = 精神安定剤としても使われる言葉です。ということは<やかましい × 静かな>という対比の中での<静かに>ではなくて<激昂する × 平静な>という対比の中での<静かに>というであって、いわば<微動だにしない肅々としたテンポ>を意味すると考えるべきではないのでしょうか。

これは芭蕉の

『静けさや岩に染み入る蟬の声』

という俳句にも一脈通ずるものがあるようにも思われます。

蟬が鳴いているのですから音として静かなわけではなく、逆に、蟬は何か異常を察知すると敏感に鳴き止むのですから、鳴いている状態そのものが、何事も起こらない安閑としたものをイメージさせるというわけです。そういった意味からは

『閑けさや岩に染み入る蟬の声』

という漢字を充てる方が正解でしょう。とにかく、そこにはすべての人為的要素を拒否し、自然に溶け込むことを求めるような意味合いを感じざるべきです。ブルックナーが意図したのはまさにその点であったろうと思われまます。

このように考えると『コーダ全体が ruhig に支配されている』と言われても全く矛盾を感じなくなります。

ruhig という指示用語は《第八交響曲》にも、その他の交響曲にもしばしば使われています。特に《第七交響曲》の第1楽章コーダ後半は Sehr ruhig (たいへん平静に) と指示されており、朝比奈はそれをまさに具現した演奏を行なっています。ところが、自筆譜にはあとから nach und nach etwas schneller (徐々に速める) と、他人による追記がなされており、これは全く私の言う ruhig に反する指示であり、『テンポはどうぞご自由に』と

述べたブルックナーの心中が察せられるところです。

テンポ指示の用語には、それ自体が1つのテンポの概念を持ったもの（アレグロやアダージョなど）とそれ自体には固定したテンポ概念がなく、以前のテンポを一定の方向へ誘導するもの（ピウモツ、メノモツ、ラングザマーなど）の2種類があります。ruhig は後者のニュアンスがあるのかもしれませんが。すなわちメノモツと同様<前のテンポより遅めに>という風に解釈することも出来るでしょう。それは<テンポを鎮静化させる>という意味から来るのでしょうか。したがってラングザマーのようにはっきりと<前のテンポより遅いテンポで>と規定するのではなく、やんわりと<遅め>を求めているのかもしれませんが。そういった観点からは ruhiger（ルーヴィッヒャー）というさらに微妙な指示もブルックナーには見られます。

とにかく、この理解のしにくい ruhig という指示語は、その示すものが掴みにくいということをもって、無視されるべきではないということは明らかです。

